

(3月号)

## 保育雑誌より

### 保育の手帖

一年のしめくりである三月を迎えて、山下俊郎氏の「この一年をふり返ってみて」に保育界の一年の間の問題がかかれて

いる。第一に昭和三十一年度は幼稚園教育要領の実践第一年であったこと。第二に幼稚園創設八十周年に当り、記念式典が挙行されたこと。第三に保育所が急激に増大し、条件の認定や措置費の問題など再検討・再編成の時期であること。第四に無認可保育所の問題が浮かび上ったこと。第五には保育の内容の問題で諸研究会や著書研究に倉橋賞が授与されることになったこと、日本教育学会に今年度から幼児教育部会が設置されたこと。いまさらながら、一年間の活潑な動きに敬服し、保育界の発展・業績

の偉大さを再認識することができた。

保育講座では、健康のところ、斎藤文雄氏が成長について専門の医学的立場で述べられているが、終りに、子どもの成長には焦りをみせてはいけない、正しい育て方をしてさえいけば普通以下でも差し支えなく、その子の持つ生まれた天分に応じて最大の伸び方をさせてやればそれでよい、とある。成長ということは肉体のみでなく精神的な伸び方についてもいえることである、ということを考え合わせるとき、親たちへのよき警句と思われる。

その他、現場に直接参考となる問題が数多いが、新劇俳優の岸輝子さんの、映画「森は生きている」が完成するにあたっての努力と情熱のほとばしる一文は読者を感激させる。

### 保育の友

もうすぐ四月、長い間幼稚園・保育園の

生活に馴れ親しんだ子どもたちが小学校に入学する季節である。保育する者にとって、は、いつくしんだ幼な子たちが大きくなりっぱになって、小学校の生徒と成長した嬉しさ、そしてその子どもを手ばなす淋しさ、そしてもう一つ、子どもたちが新しい生活にうまく適応していくことができるであらうかという心配事がある。一見、小学校も幼稚園も保育園も似た生活のように見えるが、ときに子どもは楽しかった幼稚園や保育園とは違った抵抗を学校から受けることがある。本号は、そうした問題を含めて、

『小学校と保育所』を特集としている。

保育所がわから小学校に望むこととして「保育所すれ」をどうするか……新井正子・「話し合いの場」をつくろう……風間ゆりの二氏の論文がある。新井氏は保育園ずれをしたなどといわれる子どもを作らぬために、(1)小学校・保育園がばらばらの教育体系になっているが、一貫したカリキュラムが必要・(2)地域小学校との連絡協議会を持

つこと・(3)ひとりひとりの子どもの理解のために、各園の個別保育記録を活用する・(4)校外指導の四点を提案している。風間氏は(1)保育園より入学する児童および保育そのものに偏見をもたないでもらいたい・(2)児童の個性をよくつかんで教育していただきたい・(3)児童観を確立しよう・(4)話し合いの場を求め、つくろうと述べている。

こうした点について、ある真面目な人々によって、そうした努力と解決策がとられている。私の実践記録「これが私たちの結びつき方です」……下村悠紀、おかあさんたちとの話し合い「入学を前にして家庭との連絡」……谷川正太郎・河田朝子氏などの論文がそれである。実り多き成果を期待したいと思う。

早川元二氏の「幼年教育をどう考えるか」は、幼年教育という大きなワクがひかれる理論的な基礎を探っている。それによれば幼児期は、(1)豊かな経験が次第に言語におきかえられる概念形成の時期であり、(2)事

物に対する感情形成の時期であり、そのかぎりで小学校・保育園の教育計画はもって一本筋の通ったものが欲しいと書かれている。特集の巻頭にふさわしい注目すべき論文である。

がいては本号の各論文には力作が揃っており充実した内容に読み応えを感じるが、その他に本号は予算獲得運動の経過報告にかなりの頁をさいっており、これがまたこの誌の特質とも思われた。

### 幼児の指導

「幼児の問題行動の原因は、問題行動の見られる場に求めねばならないが、その場に作用している条件として、幾つかの重なりあった人間関係を、あげることができる。幼児たちの友人関係・家族関係に目を向けるとともに、忘れてならないのは、問題行動をなくそうと努力している先生と、幼児との関係に原因がかくされている場合のこ

とである。……」と松村康平氏はのべられ、今月号は先生と子どもとの関係を、掘り下げて考えている。先生と園児とのつながりを好ましいものにするため、子ども自身の先生に対する言い分と、先生の子どもに対する言い分とをあげているのは、より好ましい人間関係をつくるための一つの手がかりになるであろう。さらに子どもの言い分を具体的に分析しているのも、おもしろく、園児たちとの生活をよりいいものにしていく努力をしたと思った。

山崎ちとせ氏の「新しく保育者となる人のために」は、すでに現場にいる者にも反省のよい機会を与えてくれる。氏は、職場になじみ、尊い経験を聞き、自分の持っているものを描しみなくわけることによって、保育の前進にわずかも役立てようとする気持が大切である。また保育の効果を急がないで、子ども一人ひとりを十分にみつめての保育でありたい。保育者・母親との話し合いの機会を持ち、一人よがりにならない

いことも大切で、また図書で勉強すること  
も必要であるが、十分批判して取捨選択す  
るように心掛けたい。保育の研究はいま  
でもなく、私生活にも研究工夫が必要で、  
時間と労力のむだをはぶくようにしなくて  
はと、強調しておられるのも、いろいろな  
点で参考になると思う。

## 幼児と保育

三月号は「生活改善と幼児教育」を特集  
している。生活改善ということは、いろい  
ろな面からしばしばうたわれていることで  
あるが、ここでは幼児教育の主要なない  
てである女性の生活改善の問題をとりあげ  
ている。幼児教育の根底にある問題として  
大事なことであろう。特集の中でも、「生  
活改善は頭の切り替えから」という座談会  
はおもしろく読める。ここで生活改善の問  
題の一つとして、「おかあさん自身の心の中  
にある壁」をとりあげて、解決の糸口を身

近なところに求めていることは、希望をも  
たせるもので、おかあさま方に一読をおす  
めしたい。

「指導技術」は毎月のことながら、具体的  
・ 实际的で、直接に保育の役に立とう。

「望ましい母親とは」は、五か月にわたっ  
て述べられた「親の態度と子どもの問題」  
の総まとめとして、望ましい母親の条件を  
あげたもので、たいへんわかりやすく説明  
されている。

「最近の美術教育」では、昨年の二つの研  
究集会の概略が紹介され、今日の幼児の美  
術教育の問題が卓なる抑圧解放論の美術教  
育から、生活画の問題、指導体系の問題と  
展開されていることがうかがわれる。

## 保育ノート

手しおにかけた、というおうか、何か自分  
のものの、という気持で接していた子どもた  
ちをおくり出すという、おとなには感傷的

な気持になる卒業の時期に当って、「卒業」  
というものについていろいろの角度からみ  
ている。

第一頁の「卒業式を迎えるに当って」の  
内容を要約すると、子どもたち（将来に生  
きる若い精神）にとっては、自分の過去を  
かえりみようとするとより、あすから始まろ  
うとする未来の生活に満ち満ちている。そ  
の子どもたちに自信をもたせることこそ大  
切なことである。ということが強調されて  
いる。次の「卒業式のあり方」では各園の  
持ち味によるいろいろの形があげられてい  
る。その中で「こんなやり方はさけよう」  
というところに、十二月号だったかの特集  
「行事」のときの問題と同じようなおちい  
りやすい点があげられている。

その他「卒業」ということにつづいて必  
ず出てくる、小学校との関連について、

- ・ 幼稚園教育の重要性について。
- ・ 小学校低学年のカリキュラムを知る。
- ・ 都合のつく限り、個々の幼稚園で小学校

の授業を参観する。

・共同参観と協議会をもつ。

・実際の学習状態からつかみ得た子どもたちのすがた。

・アンケートによる小学校がわの意見。

の各項について実例をあげながら述べられているのは、必要を認めながらあまり手がつけられていない現状からみて有益なものである。

## 保 育

「ほたるの光、窓の雪」と流れる三月の卒業期に、幼稚園の園児も小学校へ進学する。この三月号にも四月入学を前に、「小学校との連関を中心として」という稿が目につく。

幼年期の教育（坂元彦太郎氏）

社会性の面より（石黒ミナ氏）

言語の面より（菱沼太郎氏）

文字指導より（池田欣一氏）

絵画製作より（藤沢典明氏）

音楽指導より（味岡良平氏）

数の指導より（角尾和子氏）

以上、いずれも坂元氏以外は小学校の先生が幼稚園や保育所に要求していられることで、現在すでに行われていることも多々あるし、また、この点ほどの程度までしたらよいかしらと実際に迷っていたことも、この頃ではつきり小学校の先生から要求されると自信も持てるし、参考にもなる。園児を小学校へ送るときにあたり、大きな参考となる稿であろう。

現在では小学校との連関があまりよくいかず、教育内容もあまり一関性がないから双方相歩みよればよいが、まず幼児がまごつかず幸福に進学できるよう、不断の工夫と努力とが必要である。小学校は決しているやなつまらないところではない。幼稚園と同じたのしいところであるから、充分に実力を発揮し指導性のあるたのしい幼児であってほしい。また幼児の語法を豊かにす

るよう幼稚園の教師が細かい神経を使わなくてはならない。文字も書くより読めた方がよい。

表現活動においては、自信を持って表現し、興味も持続し、広き材料にふれ、美しさにも関心を持つように指導しておく必要があり、音楽では、楽しい和音訓練とリズム運動が期待され、数観念も一応幼児の生活の中に関心をもたせるように。と、このように小学校側からは要求し、また望ましい幼児として期待されている。

これは要約にすぎないが、幼児教育への期待が大きなことは私共として再度反省させられ、この上にたつ小学校教育の偉大さはと、目を見開いて期待し、また同時に小学校との連絡をもう一度論議したい気持ちを引きたたせる。

## 月刊保育カリキュラム

今月の単元は「もうすぐ一年生」

ねらいは「進学の希望をもたせながら、のびやかに幼稚園生活を楽しませる」である。そこで社会をはじめ六つの保育内容に、最後の幼稚園生活、経験をまとめる意味での計画がたてられている。

次にその内容の大略を一言ずつ紹介すること、健康ではいろいろな運動や遊びをさせることと、基本的生活習慣の完成と、進学前の健康診断について。社会では、進学のたのしんで待つということの中で、小学校の見学や、この頃には身についているべき社会面での望ましい経験四つと、修了式についてのべられている。自然では、芽が出たり、花が咲いたりすることに驚きと喜びをもつ子どもを、どういうふうに伸ばしていくか（子どもを知る。工夫をする。教師自ら自然に親しむこと）ということと、動植物の世話に責任をもつこと、さらに教師の春の花壇のプランが詳しく記されていて参考になる。言語では、とかく親たちに誤られがちな文字に対する考え方に、幼稚園

として正しい指導をしたいということ、文字よりも、もっと大切な、のびのびと思ったことを発表する子どもにしたいことなど。

音楽リズムでは、三月のうた、リズムバンド、うごき、総合劇が例をあげて、正しい発表会の持ち方とともに具体的にかかれている。絵画製作では、卒園を前に記念となるものを、工夫して作りあうことが大きな活動となっているようだ。材料もあらゆるものをみんな使って、人形・モビール・窓硝子の絵・モザイク・石膏など、いろいろあがっている。さらに一年間の絵や作品の整理を手伝わせ、子どもながらに自らの成長に驚ろいたり喜んだりして、そのときどきを思い出して語り合うのが、また一つの楽しいことといっている。

座談会「小学校入学前の両親教育」は、どのような心構えを両親にもってもらったらいいかを、園長さんに語らせている。一読してほしいところである。

## 幼児の教育 第五十六巻 第六号

◎ 定価 五十円

昭和三十二年 五月二十五日印刷  
昭和三十二年 六月 一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内  
編集兼 津 守 真  
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番  
◎本誌ご購入についてのご注文は発売所  
フレーベル館にお願いいたします。